

# 続・ふるさと

第5回

## 八丈島・越後から来た百姓

江戸時代の半ば以降、米など農作物の値段が下がる一方で肥料の値段が上がり、農業経営が難しくなってきた。町内の村むらでは、農業をやめて村を出る百姓が多くなり、潰れる家も増え、田畑の荒地化が進んでいた。領主は、村の人口を増やして荒れた田畑を復興するために、村の外から百姓を入植させようとした。

これを入百姓という。幕府領であつた西水沼村・西高橋村には明和九年（一七七二）、



八丈島からの入百姓が四人ずつ移住してきた。この入百姓政策を推進した幕府代官は、迎え入れる側の百姓が入百姓に農業・暮らし方を教えること、仲良く暮らすこと、将来は入百姓を本百姓（田畑・屋敷地を持ち村運営に参加する正規の村の構成員）に取り立てることを申し渡している。

結城藩領の東水沼村でも、天保一三年（一八四二）に越後国から四軒の入百姓が移住してきた。入百姓は生活物資を借金で調達し、相続した潰百姓の借金も引き受けなければならなかった。そこで東水沼村の村役人は、入百姓の借金返済の援助策を結城藩に求めていった。入百姓がすっかり根付くことが、村の安定に必要な不可欠だったからである。入百姓と旧来の百姓が助け合つて、荒れた田畑の復興や村づくりの励みであったのである。

### 編集後記

□広報誌面の色は紙に着色されたインクが光を反射することで作られています。一方、テレビやパソコンの色は光が発光することで色を作ります。

□夏は緑が濃くなったように見えますが、実は植物が太陽光線の中で使わない波長帯である緑を反射したものです。印刷物と同じ反射の仕組みですが我々は植物が緑色を発光しているように思い込んでいます。

□子どもが輝く夏休みですが、自ら輝く光なのか反射した光なのか、共に過ごす今年の夏休みは本当に吸収したものか何かを静かに見てあげたいと思います。  
(まんじゅこ)



Sasakia charonda (体長80mm・翅開長100~120mm)

日本の国蝶で、チョウの仲間が一番大きい。屋敷林や神社仏閣の境内等のエノキ（ケヤキに似た木）の落ち葉の下で越冬幼虫で冬を越し、7月上旬ごろにサナギから脱皮して成蝶となり、雑木林のクヌギやコナラの樹液を吸う。子どもの頃、夏休みにカブトムシを採取に山に入ったら、青い大きなチョウが飛んで来たのが印象に深く残っている。雌は雄より大きく黒褐色で紫色には輝かず、ゴマダラチョウに似ている。越冬幼虫（サナギ）の習性や形状や体色は似ているが、背面の突起が2×3列がオオムラサキでゴマダラは2×2列である。卵から孵化して初期の幼虫は毛虫で、盛んと若葉を食べる。ほとんどのチョウの成蝶やサナギは餌となる植物が異なるので、食草を見つけるとチョウと出会えることが多い。

■編集 芳賀町広報広聴委員会  
☎028(677)6032 ✉kouhou@town.haga.tochigi.jp  
■発行 芳賀町企画課  
栃木県芳賀郡芳賀町大字祖母井1020番地  
■芳賀町ホームページアドレス <http://www.town.haga.tochigi.jp>  
■苦情専用フリーダイヤル ☎0120(753)898

